

中間テストが終わり、教室の空気が穏やかになり始めた五月上旬。そんな中、彼女は突然やってきた。彼女は教壇に立つと、ゆっくりと私たちを見回し、透き通るような声で言った。

「今日から、この愛想中学に転入することになりました、田神朔夜さくやです。これからよろしくお願いします」

彼女はニッコリと柔らかな笑顔を作ると深く一礼をした。顔をあげた彼女と目が合うと、私は何故か酷い虚無感に襲われたのだった。

朝のHRが終わった。

「よ、よろしくね、田神さん！ 私は八代風花っていいいます！」

私は早速、隣の席になった田神さんに声をかけた。

「八代さん……。これからよろしくお願いします。色々分からないことが多いので、教えて頂ければ嬉しいです」

「うん、もちろんだよ。あ、風花でいいよ。敬語じゃなくてタメ口で全然オッケーだよ！」

田神さんと話をしていると、他のクラスメイト達も田神さんと話そうと、席に集まってきた。

「ねえねえ、田神さんって前はどこ中だったの？」

「田神さんって美人だよねえ。あ、朔夜ちゃんって呼んでもいい？」

「田神さんって何が好きなの？ 趣味は？ 好きな歌手は？」

集まるや否や、質問攻めの嵐で、田神さんは困ったように微笑んでいる。

「もー、みんなストップだって！ 落ち着いて、一つずつ質問しようよ！ 私が止めに入る。」

「ごめん、ごめん。転入生なんて珍しいからさ、興奮しちゃった」

クラスメイト達は質問するのをやめた。

「じゃあ一つだけ聞いていい？ どうして転校してきたの？」

クラスメイトの質問を聞いた田神さんの顔から笑顔が消えた。

田神さんは黙ったまま、少し俯いた。

「ご、ごめん！ 無神経なこと聞いちゃった。今のは忘れて？」

田神さんの状況を見て、不味いと思った生徒が謝罪をした。田神さんは下げていた顔をあげ、か細い声で話し始めた。

「前住んでいた家で火事が起きて、お母さんとお父さんが死んじゃったんだ。だから今はこの町の叔父の家を引き取られているの」

田神さんの声は震えていて、涙を含んでいた。まさか、田神さんが……。クラスメイト達も、驚きを隠せないように、みんな固まったまま動かない。

「私たち田神さんの味方だよ！」「何かあったらすぐに言ってね」と、状況を呑み込んできたクラスメイト達は、おのおの励ましの言葉をかけた。

「ありがとう」

田神さんは柔らかに微笑んだ。

「私も両親を火事でなくしているから、気持ちとかなら理解できると思うよ。だからいつでも相談してね」

私もクラスメイトに続いて言った。

「風花ちゃん……。も？」

「うん。私も火事で両親亡くしていて。あ、でも私の場合、両親から虐待されていたから複雑だけどね」

あまり簡単に人には言わないつもりだったが、不謹慎でも、共通の体験をしている人と会えて嬉しかったので、つい言ってしまった。

「そ、そうなんだ」

何故か田神さんは困惑しているようだった。

するとチャイムが鳴った。

「あ、授業始まる！」

クラスメイト達はいそいで自分の席に戻った。「私、八代さんと仲良くなりたいな」

田神さんが私に小さな声でそう言った。

その時どうしてか、悪寒を感じたのだった。

それから私と田神さんは一緒に行動することが増えて、仲良くなっていった。

今では、朔夜、と呼べるほど距離が縮まった。しかし、仲良くなればなるにつれて、私は朔夜に違和感を覚え始めていった。それが何かは、私もよく分からなかった。

朔夜がきて四ヵ月たったある日。私がいつものように学校に登校してくると、何やら教室が騒がしかった。

「ん、どうしたの？何かあったの？」

私は近くにいたクラスメイトに聞いた。

「大変だよ！田神さんの机の中にネズミの死体が入っていたんだって！」

「え……」

私は急いで朔夜のもとに駆け寄った。朔夜は涙を流しながら震えていて、それをクラスメイト達は必死に慰めたりしている。ここでも私は、変な違和感を感じた。何かが変なのだが、それが分からない。

「さ、朔夜……」

朔夜は顔をあげて私を見た。その瞬間私は全身鳥肌がたった。朔夜に言い知れぬ恐怖を感じたのだ。

それから朔夜への嫌がらせは続いた。

教科書が捨てられていたり、机に暴言を書かれていたり、下駄箱に動物の死体が入っていたり。だんだんとエスカレートしていったが、「朔夜は先生に迷惑をかけたたくない」と言い、先生にはこのことを言わなかった。

「朔夜……大丈夫？」「絶対犯人を見つけてやるんだから」クラスメイト達は今日も朔夜の席の周りに集まっている。最近は毎日のように朔夜を慰めている。私は、この前の恐怖を感じて以来、無意識に朔夜を避けていた。だけど、友達が大変な時に何もしないのは、友達としてどうかと思う。

私は久しぶりに放課後、朔夜と帰ろうと決心した。

「ねえ、朔夜一緒に帰らない？」

私は、帰る準備をしている朔夜に言った。

朔夜は、少し固まって。

「ごめん、今日は用事があったって」と言っていて、優しく微笑んだ。

「ううん。なら仕方ないよね」私は少し落胆して、今日は一人で帰ることにした。朔夜はまた後日誘おう。家に帰って、私は朔夜のことを考えてみた。朔夜になぜ違和感や恐怖を感じるのか。

「うーん……。分からないや」

私はこれ以上考えても仕方がないので、明日提出する宿題を終わらせることにした。

鞆の中から宿題のプリントを見つけようとしたが、なかなか見つからない。

「あ……。教室のロッカーだ」

私は宿題を学校に忘れてきたのを思い出した。時計を見ると今は夜の八時。今なら急いで行けばそんなに遅くならない。私は、直ぐに学校に戻った。職員室にいる先生に忘れ物したことを伝え、教室のカギを貰うつもりだったが、生憎、職員室の灯りは点いているものの、誰もいなかった。仕方ないので勝手にカギを借りることにしたが、自分のクラスのカギだけがどうやら使われていて、見当たらなかった。

「担任の先生でも残っているのかな……？」
とりあえず、私は教室に向かうことにした。

どれだけ昼に居慣れた所だとしても、夜は少し怖い。私は慎重に誰もいない校舎を歩いた。やっと自分の教室の前までくることができ、教室を軽く覗いた。教室には灯りが点いていて、人影が見えたので、誰か残っているようだ。私は恐る恐る教室のドアを開ける。

「……!?!」

教室の中には朔夜がいた。

「……風花？」

朔夜も驚いた顔をしている。しかし、私は何よりも朔夜が持っているものに驚いた。

「さ、朔夜。こんな時間になにしているの？それに、手に持っているものって」

朔夜は自分が持っている、鳥の死体に軽く目をやった後、私をじっと見つめた。なんとなくこの時点で私には察しがついた。朔夜へ嫌がらせをしていたのは、紛れもなく朔夜自身だったのだ。

「風花……。これには色々あるの。ねえ、今日誘ってくれたよね？一緒に帰らない？話したいことがあるの」

朔夜はまるで何事もないかのように私に言った。

「一緒に帰ったら、このことを説明してくれる？」

「もちろん」

朔夜は、窓から鳥の死体を投げ捨て、ハンカチで自分の手についた血を拭いた。

帰り道、私たちは無言だった。私から話しかけようとしたが、朔夜への恐怖が再び湧いてきて何も言えなかった。

とりえず、朔夜の話したいことを朔夜が話すまで待った。ちょうど、大きな川の上にある橋の真ん中まで来たとき、朔夜が急に立ち止まった。

「あのね、私は可哀想なんだ」

いきなり朔夜はそんな事を言い出した。

「火事で両親をなくして可哀想なんだ。けど、風花の方が可哀想だった」

朔夜は淡々と話し続ける。

「何が言いたいの？」

私は朔夜を精一杯睨み付けた。

「それじゃ、ダメなんだ。私より可哀想な人がいちゃ」

「何言ってる……」

「同情されにくくなってしまおう」

「だから自作自演までして、同情を集めようとしたの……?」

「けど、自作自演だってバレたら、同情してもらえなくなるの……!」

いきなり朔夜が大きい声を出すので少し驚いた。

「だから考えたんだ、この物語の結末を。火事で両親を亡くした少女は、

転校先でも仲の良い友達ができる。けれど、学校で嫌がらせが続く

ようになって、少女はその犯人が仲の良い友達だと知る。友達にそれを

問い詰めたところ、逆上され、掴み合いになった結果、友達が橋の上か

ら転落。そして友達は死んでしまう。それで少女は心の傷を負い、周り

の人は少女の傷を癒そうと思いきや優しく接する。ハッピーエンド」

「意味わかんないよ。まさか、両親が火事で死んだの……」

私は危険を察知して、尻込みをするが、朔夜がいきなり走ってきて掴

み合いになった。

「ちよっと、朔夜! 何してるのよ?」

「橋の上から転落しないと可哀想な少女の物語は続かないよ?」

「何言ってるの……」

朔夜の力は思った以上に強かった。私はほとんど橋の手すりまで押さ

れていく。

「ちよっと、待って本当に落ちる!」

「お願い。私のために、ハッピーエンドのために、死んで……?」

私の体が半分橋の手すりから乗り上げた。

「さようなら風花」

このままじゃ、本当に落ちてしまう。ならいっそ、落ちるなら一緒に落ちてやる。

私は朔夜の押してくる力に抵抗していた力を抜き、朔夜の腕を強く掴み、そのまま橋の上から落ちた。水面にぶつかる衝撃で、意識が薄れた。

今なら分かる。朔夜への恐怖心、違和感がなんだったのか。朔夜は、同

情されることで満たされている人間なんだ。だから、彼女が過去を語っ

て泣いているときも、私には嬉しそうに見えたのだ。

「ん……」

私は思い目蓋を開けた。ここはどこだろう。脳がやっと理解しはじめ

た。部屋の中の明るさからして、今は夜だろう。私はどこかに寝かされ

ている。ここは……。病院だ。私は助かったんだ! 足は全然動かないが、

手だけならなんとか動かせるのでナースコールボタンを押そうとし

た。

「おはよう、風花」

聞き覚えのある声が出て、私は体が震えた。恐る恐る首を動かして、

横を見てみると、点滴台を片手に持った朔夜が笑っていた。

「風花、1週間も寝てたんだよ……? 私は、4日前に意識を取り戻した

けどね。ちよっと遅かったね」

私は本能的に恐怖を感じとり震えがとまらなかった。そして、朔夜が

点滴台を持っている手とは違う手に注射器を持っていることに気付いた。

「……!」

私はナースコールを急いで押そうとしたが、朔夜に取り上げられてし

まった。

「安心して、この注射器は風花にうつものじゃないよ? それに、もう

打ったしね」

そう言うと、朔夜は私に繋がっている点滴を撫でた。まさか……。私

は必死に叫ぼうとしたが、声がでなかった。

「良かった。もしかして、意識が戻るんじゃないかって心配してたから」

体が何故かだんだん痺れてくるのが分かった。

「これで、可哀想な少女はハッピーエンドだね。これが最後だよ、サヨ

ウナラ風花」

私は朔夜のアザを最後に、瞼を閉じた。